九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

佐世保市宇久町平方言の可能形式について

門屋, 飛央
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1916256

出版情報：文獻探究. 55, pp.1-13, 2017-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

佐世保市宇久町平方言の可能形式について

門 屋 飛 央

1. はじめに

1.1. 本稿の目的

九州地方の五島列島の最北端に位置する、長崎県佐世保市宇久町平（たいら）方言には、以下のような可能形式がみられる。用例はまず平方言を示し、後の丸括弧内に共通語訳を示す形で挙げる。

(1) a. どがんな　じーでん　読まユー（どんな（難しい）字でも読むことができる）
b. 船ば　たのじょったてん　すぐ　乗らレタ
（船を予約していたから、すぐ乗ることができた）
c. 独りで　入りキル　わけよ　（（お風呂には）独りで入ることができるわけだよ）

(1a)は、「学習して得た知識によって、どんな難しい字でも読むことができる」ということを表している。(1b)は、「事前に船を予約していたという状況によって、すぐ乗ることができた」ということを表している。(1c)は、「年を取って足腰が弱っているとはいえ、自分の身体能力によって、独力でお風呂に入ることができる」ことを表している。(1a,c)はいわゆる「能力可能」であり、(1b)はいわゆる「状況可能」である。

九州方言が「能力可能」と「状況可能」で形式を使い分けることは、九州方言学会編(1991)をはじめ、数多くの先行研究で述べられている。しかし、平方言を調査していくと、「能力可能」や「状況可能」と考えられる文であっても、形式を使い分けていないように思われる文がある。

(2) a. 【能力可能】いっぎれして　{走らエン／走らレン}
（息切れして（これ以上）走ることができない）
b. 【状況可能】太郎わ　痛かったろどしたろ　{行かユー／行かルー}だい
（太郎は（腹が）痛かろうが何だろうが、（遊びには）行くことができるよ）

可能表現の調査において、提示した調査文を「能力可能」ととるか「状況可能」ととるかは、インフォーマントの解釈次第で変わってしまう。木部(2004 : 3-4)では、調査者の想定と違う条件でインフォーマントが調査文を解釈した場合、意図通りでない可能表現の回答が得られてしまうという問題点があることを述べている。

本稿では、ひとつの可能形式が「能力可能」にも「状況可能」にも用いられることに対して、その可能形式が、どのような場面で使用されるのかを考察する。そして、上記の問題点も考慮したうえで、話者がどのように可能形式を使い分けているのかを考察する。

1.2. 宇久町について

長崎県佐世保市宇久町は、宇久島とその属島である寺島の二島を合わせた町である。佐世保市のホームページによると[1]、2017年1月現在で人口は1155世帯2082人である。伝統的な方言話者は年々減少しており、島内の若年層には共通語化が進んでいる。本稿では、宇久町の中でも平郷の平集落で話されている方言を平方言と呼び、平方言を中心に考察を進める[2]。

図 1　宇久町の位置

2.　「可能」の接尾辞

2.1. 可能の接尾辞の接続

平方言の動詞は、大きく子音語幹活用動詞（以下、子音語幹動詞）と母音語幹活用動詞（以下、母音語幹動詞）に分かれ、その他、カ行変格活用（以下、カ変動詞）、サ行変格活用（以下、サ変動詞）の変格活用動詞がある。以下に、それぞれの動詞の一例を挙げる。

(3)　子音語幹動詞：kak-'書'、kas-'貸'、mat-'待'、sin-'死'、nom-'飲'、orab-'叫'、hjar-'入'、kuw-'食'、okir-'起'

母音語幹動詞：n{e/u}-'寝'、ak{e/u}-'開'

カ変動詞：k{o/i/u}-'来'

サ変動詞：s{e/i/u/φ}-'為'

これらの動詞語幹に屈折接尾辞と派生接尾辞が接続する。母音語幹動詞、カ変動詞、サ変動詞は、あとに続く接尾辞によって、母音が交替する。以下に、動詞ごとの表を示す。

(4)　平方言の動詞屈折接尾辞の活用表

		非過去	否定	過去
	語幹	-(r)u	(-a)-N	-ta
子音語幹動詞	kak-'書'	kak-u	kak-a-N	k(j)aa-ta
母音語幹動詞	ake-'開'		ake-N	ake-ta
	aku-	aku-ru		
カ変動詞	ko-'来'		ko-N	
	ki-			ki-ta
	ku-	ku-ru		
サ変動詞	se-'為'		se-N	
	si-			si-ta
	su-	su-ru		
	s-			

これら 4 種類の動詞に、可能の形式が接続する。可能形式のひとつである/-(j)aje-/（ヤユル）は、子

音語幹を持つ、子音語幹動詞とサ変動詞には/-aje-/で接続し、母音語幹動詞は/e/の母音語幹に、カ変動詞は/i/の母音語幹に、/-jaje-/で接続する。もうひとつの可能形式の/-(r)are-/（ラルル）は、子音語幹を持つ動詞には/-are-/で接続し、母音語幹動詞は/e/の母音語幹に、カ変動詞は/o/の母音語幹に、/-rare-/で接続する。さらに別の可能形式である/-(i)kir-/（キル）は、子音語幹動詞には/-ikir-/で接続し、母音語幹動詞の/e/の母音語幹、カ変動詞とサ変動詞の/i/の母音語幹に、/-kir-/で接続する。

3 つの可能形式のうち、/-(j)aje-/と/-(r)are-/は派生してできた動詞語幹末が母音になるので、母音語幹動詞と同様の活用をする。/-(i)kir-/は語幹末が子音になるので、子音語幹動詞と同様の活用をする。

/ake-(j)aje-/（「開ける＋ヤユル」）を例に挙げると、「過去」の接尾辞/-ta/が接続する場合、/ake-jaje-ta/になる。「非過去」の接尾辞/-(r)u/が接続する場合、母音語幹動詞と同様、語幹が/ake-jaju-/になり、//ake-jaju-ru//になる。さらに、多くの場合、平方言は文末で最終音節末の母音 u が脱落する。脱落した際は、その子音の音声的特徴にしたがって、特殊モーラで言い切り、/hjar-u/'入る'、/aku-ru/'開ける'、/ku-ru/'来る'、/su-ru/'する'などの r 音であれば、前の母音が長母音となる[3]。したがって、//ake-jaju-ru//は/akejajuu/になる。「ラルル」の場合も同様で、//ake-raru-ru//は/kakaruu/になる。

2.2. 動詞派生接尾辞からの類推

平方言では「読むことができる」ことを「ヨマユル」と言い、「ヨミユル」と言うことはない。『方言文法全国地図』第 173 図「読むことができる〈能力可能〉」をみると、長崎県辺りの地域では「ヨマユル」と「ヨミユル」の両形式が挙げられている。九州方言学会編(1991)、愛宕(1978)、木部他(1988)でも、同地域の方言を調べたなかで、ア段音接続とイ段音接続の「ユル」に地域差があることを述べている。

この「ユル」は「得る」由来の形式であるため、「ヨミユル」（読み得る）などのイ段接続の「ユル」が元々の形式であったと考えられる。ア段音接続の「ユル」という形式について、愛宕(1978)、神部(1992)は、否定文での「読まエン」を取り上げ、「読みワエン」のような「は」助詞の挿入が観察されることを述べている[4]。九州方言学会編(1991:224)では、この「は」助詞の挿入が、肯定文ではみられず、否定文でみられる現象であると述べている。愛宕(1978：140)は、「は」助詞挿入の形式である「行きワエン」が「行きゃエン」になり、「行かエン」になったという変化を述べている。

平方言では、この「は」助詞挿入の形式はみられない。話者には、動詞語幹にア段音で接続する形式と考えられている[5]。

(5) a. 【子音語幹動詞】書かエン／*書きワエン（書くことができない）
　　b. 【母音語幹動詞】開けヤエン／*開けワエン（開けることができない）

このような変化が起こったとき、肯定文は「書きユル」で、否定文は「書かエン」となり、肯否によって接続が異なることになる。そこで平方言では、否定文の接続に合わせ、子音語幹動詞の語幹にア段音接続の「ユル」が接続した。これにより、子音語幹動詞にア段音まで含む/-aje-/という形式が接続すると捉えられたと考えられる。

この形式が母音語幹動詞に接続するときに、/ake-jaje-/'開'のように、/j/を挿入する形式で用いられるようになった。そうして、/-(j)aje-/という接尾辞ができたと考えられる。

(6) a. 【母音語幹動詞】力の　のして　ドアの　開けヤエン
（力が無くて、ドアを開けることができない）

b. 【カ変動詞】島に　きヤエン（（太郎はすぐには宇久）島に来ることができない）

このような変化があったのは、「可能」「受身」を表す/-(r)are-/や、「使役」を表す/-(s)ase-/といった、ヴォイスを表す他の動詞派生接尾辞からの類推もあったのではないだろうか。カ行変格活用動詞に属する「来る」以外の動詞は、/-(j)aje-/と/-(r)are-/が同じ語幹に接続している。以下に、それらの接尾辞を接続した動詞の活用表を示す。

(7) 平方言の動詞派生接尾辞の活用表

		可能	可能、受身等	可能	使役
	語幹	-(j)aje[6]-	-(r)are-	-(i)kir-	-(s)ase-
子音	kak-'書'	kak-aje-	kak-are-	kak-ikr-	kak-ase-
母音	ake-'開'	ake-jaje-	ake-rare-	ake-kir-	ake-sase-
	aku-				
カ変	ko-'来'		ko-rare-		ko-sase-
	ki-	ki-jaje-		ki-kir-	
	ku-				
サ変	se-'為'				
	si-			si-kir-	
	su-				
	s-	s-aje-	s-are-		s-ase-

ア段音接続の「ユル」が//-(j)aje-//であるのに対し、イ段音接続の「ユル」は//-ije-//と考えられ、両形式は別の派生接尾辞であると考えられる。したがって、本稿では/-(j)aje-/を「ヤユル」と呼び、「ユル」と区別して扱う。また、/-(r)are-/、/-(i)kir-/は先行研究に従い、「ラルル」、「キル」と呼ぶ。

なお、平方言では可能動詞を用いない。当該地域と同じ五島列島に位置する、福江市方言を調査した木部(2004：6)は、可能動詞は共通語的であるというインフォーマントの内省を述べている。平方言も同様であると考えられる。

3. 平方言の可能形式

3.1. 「可能」の条件スケール

渋谷(2006：65-66)では「可能であることの条件」を以下の 4 つに分類している。

(8) a. 心情可能

b. 能力可能[7]

c. 内的条件可能

d.　状況可能（外的条件可能）

上記の条件を、渋谷(1993：32-33)では「動作主体とそれぞれの条件との密着度（不可分性）」という観点で並べ、「可能の条件スケール」を設定している[8]。さらに、このスケール上で可能形式が用いられるときに、ひとつの形式が他の形式を飛び越えて用いられないことを指摘している。このスケールに、渋谷(2006)で示した条件をあてはめると、以下のようになる。

(9)　「可能の条件スケール」

←動作主体内部条件　　動作主体外部条件→

心情可能　―　能力可能　―　内的条件可能　―　状況可能（外的条件可能）

このスケールを用いて考察を進める。しかし、動作主体内部条件の極に置くものは、「心情可能」ではなく「能力可能」にする。その理由を説明するため、渋谷(2006：65)に示される「心情可能」の説明を以下に示す。

(10)　心情可能：動作主体の内部に永続的に存在する心情（性格）的な条件（性格や気持ち、勇気など）によって（可能／）不可能であることを主観的に述べるもの。否定文の場合、「～したくない」といった意味に近くなる。

渋谷(2006：68-70)では、大阪方言の「ヨー泳がん」（泳ぐことができない）などの、「ヨー」を取り上げ、この「心情可能」の説明をしている。この「ヨー」は、一人称現在否定文に限定される傾向があり、話し手の能力の有無を客観的に差し出すというよりも、話し手の気持ちを表す文としての側面が強くなることがあると述べている。渋谷(2006)では、「ヨー」のように、可能形式が話者の心情を含めて用いられることを「モーダル化」と呼んでいる。渋谷(2006)では、可能形式が「能力可能」から「心情可能」へと変化し、その「心情可能」からモダリティ形式へと変化することを述べている。

しかし、渋谷(2006)の述べるような変化が起こることと、「心情可能」を可能の条件スケールに含めることは別問題であると思われる。話者の心情は、「能力可能」と「状況可能」にかかわらず、含めることができるものだからである。したがって、動作主体内部条件の極は「能力可能」と考える。

永澤(2004)は、渋谷(1993)を参考にしながら、「能力可能」から「状況可能」へのスケールを、その行為を可能にする要因別に 8 分類している。永澤(2004)は、渋谷(2006)よりも要因を細かく分けている。どのような要因が、平方言の可能形式の使い分けに関わるかを調べるために、永澤(2004)の分類を参考にする。

3.2　「ヤユル」「ラルル」

それぞれの可能の意味で、平方言の「ヤユル」と「ラルル」が使用できるかを示していく。「キル」はインフォーマントにとって普段使用する形式ではないと判断されるため、この節では考察から除外し、後述する。永澤(2004)の分類を用いて、動作主体内部条件と考えられるものから、動作主体外部条件と

考えられるものに向けて、順に挙げていく。

まず、動作主体の技能や獲得能力を表す「個々人の能力」について、用例を挙げる。これは渋谷(2006)では「能力可能」にあたる。

(11)　【個々人の能力】〔技能；獲得能力；知識；心情自制力など〕

a.　あんま　はよなかてん　{走らエン／*走らレン}〔技能〕
（（足が）あんまり速くないから、（100 メートルを 11 秒で）走ることができない）

b.　太郎わ　あひが　はやかてん　{走らユイ／*走らルー}〔技能〕
（太郎は足が早いから、（100 メートルを 11 秒で）走ることができる）

c.　とてもじゃなかばって　{弾かエン／*弾かレン}〔獲得能力〕
（（私はピアノを）とてもじゃないが弾くことができない）

d.　おとろしゅして　{ひゃらエン／*ひゃらレン}〔心情自制力〕
（（私は独りではお化け屋敷に）恐ろしくて入ることができない。）

「個々人の能力」では「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

次に、「生物学的能力」の用例を挙げる。これは上記の「個人」に対して、生物学的な「種」の能力を表す。

(12)　【生物学的能力】

a.　人わ　空わ　{飛ばエン／*飛ばレン}（人は空を飛ぶことができない）

b.　カラスは　{飛ばユー／*飛ばルー}（カラスは（空を）飛ぶことができる）

c.　ものば　{ゆわエン／*ゆわレン}（（カラスは）言葉を話すことができない）

「生物学的能力」でも「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

「経済力」は、動作主体の金銭的な支払いの能力を表している。「経済力」は、個人が必ずしも継続して持つ能力とは限らないが、個人にある程度の期間に付与されている能力である。

(13)　【経済力】

a.　金もーじゃてん　なーんでん　{買わユー／*買わルー}
（（私は）金持ちだから、何でも買うことができる）

b.　あの人わ　びんぶじゃてん　なんも　{買わエン／*買わレン}もんね
（あの人は貧乏だから、何も買うことができないものね）

「経済力」でも「ヤユル」が用いられ、「ラルル」は用いられない。

永澤(2004)では「身体の状況」を、動作主体の身体にどれくらいの期間継続して保たれているかによって、「中・長期的」と「短期的」に分けている。「中・長期的」は一定期間の状況を表すのに対し、「短期的」は一過性の状況を表している。ここからは、渋谷(2006)の「内的条件可能」にあたる。

(14)　【身体の状況（中・長期的）】

a.　いっも　稽古しちょーてん　{さーユーだい／*さールーだい}〔体力〕

（いつも稽古をしているから、（何キロでも走ることが）できる）

b.　目の　わるなったてん　じーわ　{読まエン／*読まレン}〔視力〕

（（年を取って）目が悪くなったから、（新聞の）字は読むことができない）

c.　あーしゃ　怪我しちょーばって　{走らユー／*走らルー}〔怪我〕

（足は怪我しているけれども、走ることができる）

「中・長期的な身体の状況」の場合、「ヤユル」が用いられ「ラルル」は用いられない。

(15)　【身体の状況（短期的）】

a.　いっぎれして　{走らエン／走らレン}〔疲労〕

（息切れして（これ以上）走ることができない）

b.　ハハ　ゆーおーばって　あんなら　まだ　{走らユー／走らルー}じゃろだい

（（太郎は息切れして）ハアハア言っているけれど、あの様子ならまだ走ることができるだろうよ）〔疲労〕

c.　腹ん　痛かばって　遊びわ　{行かユイ／行かルイ}よ〔体調〕

（（私は）腹が痛いけれども、遊びには行くことができるよ）

d.　太郎わ　痛かったろどしたろ　{行かユー／行かルー}だい〔体調〕

（太郎は（腹が）痛かろうが何だろうが、（遊びには）行くことができるよ）

e.　すわっちょって　{たっあがらエン／たっあがらレン}〔足のしびれ〕

（（私は正座で）座っていて（足がしびれて）、立ちあがることができない）

疲労や体調、足のしびれなどの「短期的な身体の状況」の場合、「ヤユル」と「ラルル」のどちらも用いられる。「長距離を走ること」や「足の怪我が治ること」は、数日でなせることではなく、ある程度の期間が必要である。それに対して、「息切れをすること」や「正座で足がしびれること」は、数分で治まることであり、「腹が痛いこと」も数日続くことではない。このように動作主体の状況が短期間のものであるとき、「ラルル」が用いられている。

「外的条件」とは、自然現象や予定など、動作主体自身ではないところに可能となる条件があることを表している。ここからは、渋谷(2006)の「状況可能」にあたる。

(16)　【外的条件】〔自然現象；予定；その他の外的条件〕

a.　今日わ　凪じゃてん　{行かユー／行かルー}〔自然現象〕

（今日は凪だから（福岡に）行くことができる）

b.　なんの　たこして　{おえがエン／おえがレン}〔自然現象〕

（（今日は）波が高くて泳ぐことができない）

c.　用のあって　わがいえ　おらなじゃてん　{行かエン／行かレン}よ〔予定〕

（（私は）用事があって、我が家にいなくてはならないから、（遊びに）行くことができないよ）

「外的条件」では、「ヤユル」も「ラルル」も用いられている。

「自発的心情」は、「外部条件」よりも動作主体内部条件に寄った意味とも考えられるが、その心情を引き起こすきっかけは、動作主体の意志とは離れたところにあるという点で、動作主体外部条件に寄った意味だと考える[9]。

また、次の「動作対象の属性」は、動作主体の意志とは無関係である点で、動作主体外部条件に位置すると考える。

(17)　【自発的心情】

派手か服わ　とてもじゃなかば　{着らエン／着らレン}よ

（派手な服はとてもじゃないが着ることができないよ）

(18)　【動作対象の属性】

a.　こんみんわ　つくひかてん　{飲まユイ／飲まルー}よ

（この水はきれいだから飲むことができるよ）

b.　今　こっきたばっかーじゃけん　よー　{書かユー／書かルー}[10]

（（ペンを）今買ってきたばっかりだから、（すらすら）書くことができる）

c.　こら　十年前んとじゃもん　なんの　{書かユッ／書かルー}かよ

（これ（ペン）は十年前のものだもの、どうして書くことができる（と思う）かよ）

「自発的心情」と「動作対象の属性」でも、「ヤユル」と「ラルル」が用いられている。

以上をみると、「ラルル」が動作主体外部条件で用いられるのに対し、「ヤユル」は動作主体の条件に関係なく、可能表現一般に広く用いられているようにみえる。

しかし、「ラルル」のみが用いられ、「ヤユル」が用いられない文もある。次節では、どちらかにしか用いられない文をみて、「ヤユル」と「ラルル」の意味を考察する。

3.3.　条件による形式の区別

平方言では、以下の文で「ヤユル」を用いない。

(19)　a.　【外的条件】船の　出んてん　{*乗らエン／乗らレン}

（（今日は台風で）船が出ないので、（船に）乗ることができない）

b.　【動作対象の属性】よそわひかけん　{*飲まエン／飲まレン}

（この水は汚いから飲むことができない）

「船に乗ることができないこと」や「水が飲むことができないこと」という不可能の事態は、「船が出ないこと」や「水が汚いこと」に原因がある。これらの原因は動作主体内部の能力でどうすることも

できないことである。

「ヤユル」と「ラルル」のどちらも用いられる文を改めてみると、不可能の事態の原因を、動作主体内部の能力次第で、可能にもできる事態であることがわかる。

(20) a. 【外的条件】なんの　たこして　{おえがエン／おえがレン}〔自然現象〕
（（今日は）波が高くて泳ぐことができない）（(16b)再掲）

b. 【自発的心情】派手か服わ　とてもじゃなかば　{着らエン／着らレン}よ
（派手な服はとてもじゃないが着ることができないよ）（(17)再掲）

「海の波が高いこと」は危険な状況ではあるが、必ずしも「泳げないこと」にはならず、「派手な服を着ること」も恥ずかしさがあるだけで、「着られないこと」にはならない。どちらの用例も、動作主体である話者自身が、その能力を自分が持っていないと考えているところから、不可能が用いられている。この不可能の原因が、話者自身の内部にあると述べるために「ヤユル」が用いられていると考えられる。

渋谷(2002：12)は、状況可能を主体の行動決定権の有無によって二分し、典型的な「状況可能」を動作主体の行動決定権がないものと述べている。

(21) a. 今日は忙しいから手紙が<u>書けない</u>
（書くか書かないかの最終的な選択は主体に任されている）

b. ペンがないから手紙が<u>書けない</u>（書くという選択肢は主体に与えられていない）

（渋谷(2002)用例(25)(26)）

(20)で示した事態は、動作主体が最終的に、その動作を行うか決定できる事態であるため、(21a)に当たる。渋谷(2002)は、(21b)を典型的な「状況可能」だと述べている。動作主体の行動決定権がないということは、動作主体内部の能力ではどうにもできないことであるため、「状況可能」の「ラルル」だけが用いられると考えられる。

しかし、(21)の用例を平方言では、どちらの文にも「能力可能」の「ヤユル」が用いられる。

(22) a. 忙ひかてん　書かエン（（今日は）忙しいから（手紙を）書くことができない）

b. かっもんの　なかけん　書かエン（書くものがないから、書くことができない）

これは、「手紙を書くことができないこと」の原因を、自分の責任と捉え、その責任を果たす能力がなかったと考えているためだと思われる。動作主体の行動決定権がないと考えられる事態であっても、動作主体に落ち度があると捉えられる場合には、「ヤユル」が用いられる。

(23) a. 金庫の　鍵ば　のーならかしたけん　開けヤエン
（金庫の鍵をなくしたので、（明日は金庫を）開けることができない。）

b. ぜんの　なかてん　買わエン（（手元に）お金がないから、買うことができない）

それに対して、動作主体にまったく落ち度がないときには、「ラルル」しか用いられない。

(24) a. *泳がエンじゃった／泳がレンじゃった
（（プールが改装中で）泳ぐことができなかった）
b. あかんの　こまかてん　{*見らエン／見らレン}
（灯りが小さいから、字を見ることができない）

動作主体の落ち度ではないことが原因で、行動決定権がないということは、動作主体内部がその事態に一切関わっていないことを表す。このことは、動作主体外部条件の極に位置していると考えられる。「ラルル」は、動作主体外部条件による事態であることを表している形式であるといえる。

ただ、動作主体がいる以上、文脈の中で動作主体内部の条件が一切関わらないというのは難しい。「ヤユル」が広い範囲で用いられていることは、その事態が動作主体内部条件による事態であることを表している。「個々人の能力」のような、動作主体内部の条件としか捉えられない事態では、「ラルル」は用いられない。

平方言では、動作主体がその事態をどのような条件による事態と捉えているかによって、「ヤユル」と「ラルル」を区別していると考えられる。「ヤユル」は事態が動作主体内部に属する可能の事態であることを表している。それに対して、「ラルル」は事態が動作主体外部に属する可能の事態であることを表している。

4. 平方言の「キル」

平方言の「キル」は、調査時にこちらから「キル」が使えるか聞き返さない限り、回答されなかった。インフォーマントにとって「良か言葉」という対外的な場面で用いる言葉であって、普段は使わないという回答を得た。話者は「キル」を、伝統的な平方言ではない、最近の形式であると考えている。

九州方言の「キル」が若い世代に多く使用されているため、新しい可能形式であるということは、九州方言学会編(1991)、愛宕(1978)、神部(1992)に述べられている。神部(1992 : 307-308)では、「キル」は、「（最後まで）投げきる」のような完遂・完行の意味から、意志や能力の完全な発揮を表して、「能力可能」の形式になったと述べている。

この「キル」は、調査時にあまり使用されなかったが、自然談話のコーパス資料の中では、少なからず用いられているのが確認できる。以下に示す自然談話コーパスは、2013 年 10 月に行った、生え抜きの平方言話者の 80 代の女性 3 名による談話の資料である[11]。用例後の括弧で、どの話者が発話したかを示している。

(25) a. ホームに　入るのわ　もー　なごって　一週間　もー　一週間　おれば　おりキラン
（ホームに入るのはもう長くて、一週間、もう、一週間いると（それ以上）いることができない）（A）

b.　自分の　あれば　わからんじ　用意も　しキランじゃったっちゃん
（（突然具合が悪くなって）自分のあれこれを分からなくなって、用意もできなかったんだよ））（A）

c.　覚えキランもんね（（ダンスを）覚えることができないものね）（B）

以下に示す用例は、調査時に別の形式を回答されたものを、「良か言葉」で使用できるかと聞き直したものである。

(26)　a.　おひかてん　はしーキラン
（（足が）遅いから（100 メートルを 11 秒では）走ることができない）

b.　弾きキー（（私はピアノを）弾くことができる）

c.　じーば　書きキラン（（うちの孫はまだ）字を書くことができない）

d.　びんぶーじゃけん　なんも　買いキラン
（（私は）貧乏だから何も買うことができない）

e.　いっも　稽古しちょーけん　しーキーだい
（いつも稽古をしているから、（何キロでも走ることが）できる）

(26)に挙げた用例は、永澤(2004)の(11)「個々人の能力」から(14)「身体の状況（中・長期的）」までに分類されるものである。これらの意味は、動作主体内部条件に偏る意味である。(15)「短期的な身体の状況」以降の、動作主体外部条件に偏る意味では、「キル」は用いられない。

木部(2004：5-6)では、長崎市方言の「キル」について、動作の実現に動作主体の労力が必要かどうかで、「状況可能」で使用できるかどうかが変わると述べている。労力が必要な場合は「キル」が用いられ、不要な場合は用いられないと述べている。以下に、木部(2004)に挙げられている長崎市方言の例を示す。

(27)　a.　【状況可能に「キル」が用いられるもの】
（今は時間がないので）読マレン／読メン／読ミキラン

b.　【状況可能に「キル」が用いられないもの】
（プールが休みで）泳ガレン／泳ゲン

労力が必要であるということは、動作主体の能力を用いることにつながるため、「状況可能」であっても動作主体内部条件の側にそれだけ近寄るということである。長崎市方言の「キル」の使用は、平方言の「ヤユル」が、その可能の事態を動作主体内部に原因があると捉えると使用ができるということと類似している。

平方言の「キル」は、その事態が動作主体内部に原因があると捉えられるときでも、「状況可能」と思われる文では用いられない。

(28)　a.　いっぎれして　{走らエン／走らレン／*はしーキラン}

（息切れして（これ以上）走ることができない）（(15a)再掲）

b. いっぎれわ　しーよーばって　まだまだ　{走らユイ／走らルイ／*はしーキー}よ
（息切れはしているけれど、まだまだ走ることができる）

長崎市方言の「キル」と異なり、平方言の「キル」は、動作主体内部条件の極に位置する「能力可能」でなければ使用できない。動作主体の能力による動作の完遂という面を、平方言の「キル」は持っていると思われる。「状況可能」と思われる文でも用いられる「ヤユル」に対して、「キル」は明確に「能力可能」であることを明示している形式である。

5. まとめ

本稿では、平方言の可能形式の「ヤユル」と「ラルル」と「キル」を考察した。「ヤユル」は動作主体内部条件を表す形式であり、「ラルル」は動作主体外部条件を表す形式である。「状況可能」と思われる文であっても、話者自身が、動作主体内部にその原因があると考える場合、「ヤユル」が用いられる。「キル」は、動作主体の能力による動作の完遂という面があり、「能力可能」でしか用いられない。

平方言の「ヤユル」は、「は」助詞を挿入した形式を元としながらも、もはや/-(j)aje-/という一形式で用いられている。この変化は、平方言におけるヴォイスに関わる他の動詞派生接尾辞からの類推ではないかと考えられる。

今回扱った「可能」は、その動作が潜在的に事態を実現できる可能性を持っていることを述べる表現であり、「潜在可能」と呼ばれる。それに対し、実際にその実現がなされたかを述べる表現を「実現可能」と呼ぶ。平方言での「実現可能」は、「ヤユル」を用いている。以下に、例を挙げる。

(29) a. 持たエンかち　思っちょったばって　{持たエタ／*持たレタ}
（(この荷物を)持ち上げられないかと思っていたけど、持ち上げることができた。）

b. 今日わ　よー　泳がエヨイよ（（太郎は）今日は上手に泳ぐことができているよ）

c. 今日わ　じょーとーに　作らエオイよ（（太郎はケーキを）今日は上手に作ることができているよ）

平方言での可能表現を考察するためには、このような「実現可能」も含めて記述する必要がある。本稿では今後の課題とし、改めて考察を行いたい。

注

[1] http://www.city.sasebo.lg.jp/kikaku/seisak/setaisu.html（2017 年 2 月 19 日検索）

[2] 本稿の主なインフォーマントは、1928 年（昭和 3 ）年生まれの女性である。14 歳から 17 歳まで長崎市に住んでいた以外は、平で生活していた。2015 年からは、長崎市で生活している。両親とも平出身であり、平方言の生え抜きの話者である。調査は、面接調査を行い、共通語で示した文を方言での言い方に直してもらった。

[3] r 以外の子音を、屈折接尾辞の非過去を例にして挙げる。/kak-u/'書く'、/kat-u/'勝つ'、/orab-u/"叫ぶ'、/waraw-u/"笑う'などの k、

t、b、w は促音、/oeg-u/"泳ぐ"、/nom-u/"飲む"、/sin-u/"死ぬ"などの g、m、n は撥音、/kas-u/"貸す"などの s は無声硬口蓋摩擦音の[ç]となる。

[4] 天草方言を調べた神部(1992：304)では、「しエン」と「しワエン」の両形式の使用のうち、「は」助詞挿入の「ワエン」の形式の方が一般的であると述べている。

[5]平方言のインフォーマントからも、「書かエン」を最も使用するが、「書きゃエン」を使用することもできるという回答を得た。

[6] /je/は平方言では[je]とも[e]とも発話される。この音声的な違いは、平方言で弁別的な特徴として認識されていないため、同じ形式と考える。音韻表記の際は/je/と記し、カタカナで用例を示す際には「エ」を用いる。

[7] 渋谷(2006：65-66)では、「能力可能」に 4 つの下位分類をたてている。「生得能力と獲得能力」、「肉体的力と知識」、「（人間の能力と）人間以外の能力」、「種の能力（総称）（と個体の能力）」の 4 つである。

[8] 井島(1991：157)で述べる「内因可能」と「外因可能」も、渋谷(1993)で述べる「動作主体内部条件」と「動作主体外部条件」と似た観点であると考えられる。ただし、両氏でその含む意味分類が異なるため、本稿では、渋谷(1993)を基に考察を行う。

[9] 渋谷(1993：28-29)では「外的強制条件」と分類され、これは「可能の条件スケール」の「外的条件」より動作主体外部条件に寄った位置にある。その外部条件が動作主体の意志の介入を許さないかたちで働くためであると述べている。

[10] この文を平方言で発話してもらった時、「カクー」（書くことができる）という可能動詞も回答された。調査中に可能動詞の使用を尋ねても、使用しないという回答であった。この文以外では調査が不十分であるため、本稿では考察の対象から外し、今後の課題とする。

[11] 3 名の話者の生年月日、外住歴を示す。話者 A は 1928（昭和 3）年生まれの女性で、生まれてからずっと平郷に住んでいる。話者 B は 1930（昭和 5）年生まれの女性で、0 歳から 16 歳まで平郷、17 歳の時に佐世保市、18 歳から 19 歳まで長崎県北松浦郡鹿町（現、佐世保市鹿町）、19 歳から現在まで平郷で生活している。話者 C は本稿の主なインフォーマントとして注 2 に示した女性である。この談話コーパスの中でも、話者 C は「キル」を使用していない。

参考文献

愛宕八郎康隆(1978)「肥前長崎地方の「～キル」「～ユル」について」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』27

井島正博(1991)「可能文の多層的分析」仁田義雄編『日本語のヴォイスと他動性』くろしお出版

神部宏泰(1992)「第六章　表現形式交替の史的法則　第一節　九州方言における可能表現法―形式の隆替と表現特性―」『九州方言の表現論的研究』和泉書院（初出は「九州方言の可能表現法―その存立と特性―」『兵庫教育大学研究紀要』7-2、1987 年）

木部暢子、石田直子、市橋潤子、井上優子、川島由美、宮崎朋子、村嶋奈保子、室谷愛子(1988)「九州北部の可能表現」『文献探究』21

木部暢子(2004)「九州の可能表現の諸相―体系と歴史―」『国語国文薩摩路』48

九州方言学会編 (1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房（初版は 1969 年）

国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図　第 4 集』財務省印刷局

渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1

渋谷勝己(2002)「可能」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』(1998-2001 年度科学研究費研究成果報告書、研究代表者：大西拓一郎)

渋谷勝己(2006)「第 2 章　自発・可能」小林隆、佐々木冠、渋谷勝己、工藤真由美、井上優、日高水穂著『シリーズ方言学 2　方言の文法』岩波書店

永澤済(2004)「式根島方言の可能形式 2 種の意味領域―「能力可能」と「一般可能」―」『日本語文法』4-2

（かどや　たかてる・本学大学院博士後期課程）